



一般社団法人日本生態学会

No.38

2016年1月

# ニュースレター

## [目次]

電子投票のセキュリティについての説明とお詫び.....	1
第12回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して.....	2
記事	
I. 次々期会長候補及び次期代議員選挙結果.....	4
II. 学会各賞受賞者決定.....	5
III. 書評依頼図書.....	5
IV. 寄贈図書.....	5
V. 地区会報告.....	5
書評.....	14
京都大学生態学研究センターニュース.....	16



## 会員の皆さまへ

### 電子投票のセキュリティについての説明とお詫び

会長 齊藤 隆

2018-2019年度の次々期会長と2016-2017年度の次期代議員選挙の実施に協力くださり、ありがとうございます。選挙結果は、2015年12月26日に開かれる理事会に報告され、確定いたしました。選出された次々期会長と代議員の方々の氏名は別に掲載した「選挙結果」をご覧ください。

電子投票のセキュリティについて重要な報告があります。選挙は2015年10月1日～10月31日に実施されましたが、この期間中に会員の方から電子投票のセキュリティが不十分であるとの指摘を受けました。「電子投票内容が暗号化される設定になっておらず、生態学会がSSL認証を購入しているにもかかわらず活用せずに、十分なセキュリティ管理がなされていない。」というものです。

ご指摘に対して、執行部は、選挙管理委員会と相談しながら、電子投票システム開発及びメンテナンス担当者、電子投票開始以降の事情を知る元執行部から事情や経緯を聞きました。その結果、2012年時点で、電子投票のセキュリティに関する問題点を認識し、SSL証明を購入していたにもかかわらず、今回の電子投票開始時にはそれを活用せずに、結果的に不十分なセキュリティ管理のもとに電子投票が開始されていたことがわかりました。

執行部、選挙管理委員会、電子情報委員会は、内部調査と平行して、電子投票のセキュリティ向上させるために2015年10月15日からSSL認証システムを導入しましたが、httpsへの変更までの期間（2015年10月1日～10月14日）、つまり、httpを利用していた期間には、(1)投票者の投票内容が（悪意のある第三者により）読み取られる可能性があったこと、(2)読み取られることにより投票者の電子キーが盗まれ、電子キーの本来の持ち主による投票内容が改ざんされた状態で（盗んだものにより）投票される可能性があったことを否定できません。会員の皆さんに不安を与えてしまったことについてお詫びいたします。申し訳ありませんでした。

しかし、(1)については、読み取った者が何らかの行動（他者に知りえた内容を公表するなど）をとらない限

り確認できないため、このような事実がなかった以上、読み取られたことの有無は確認できないものの、読み取りのみによる利益が想像できないため、このような事実はなかっただろうと考えています。また(2)については、投票システムが一時的に設置され、また通信量も限られること、本人の投票キーを使った投票は一回のみ可能でありことから、サーバとのデータ交換内容を解析してなりすますことは困難であると考えられる。また、実質的に投票結果に影響するには投票システムが動いているサーバ近傍での通信経路への介入が必要であり、これは一般のネットユーザには極めて困難である。これらのことから、投票内容の改ざんプログラムが仕込まれて選挙結果に影響を受ける可能性は非常に小さいと認識しています。

これらの調査結果を選挙管理委員会に報告し、同委員会から今回の選挙は有効であるとの判断をいただいています。また、理事、監事等とも協議した結果、今回の選挙結果に基づいて今後の学会の運営に当たることになりました。

私たちは今回の事態をヴォランティアワークに頼っている学会運営の限界の現れであると考えています。執行部、選挙管理委員会、電子システム構築及びメンテナンス担当者は、自身の業務も多忙をきわめる中で、奉仕の精神に基づいてできる限りの努力をしています。「SSL認証を購入しているにもかかわらず活用しなかった」ことは不作為にあたり、お詫びしなければなりません。しかし、学会、大会運営に関わる者はこれまで、ヴォランティア精神だけではこなしきれないほど多くの学会業務を負担してきたことをどうぞご理解ください。この認識に立って、我々は学会、大会運営業務の外注化を計画しています。電子投票についても次回からは信頼のおける業者に委託して実施する計画です。

言い訳じみた説明になってしまいましたが、学会、大会運営に関する厳しい現状をご理解のうえ、これからも学会、大会運営に協力くださいますようお願い申し上げます。

## 第13回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して

木下晃彦、佐々木晶子、別宮有紀子

日本生態学会が正式に加盟している男女共同参画学協会連絡会主催の第13回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムが10月17日(土)に千葉大学西千葉キャンパスで開催された。日本生態学会からはキャリア支援専門委員会4人(委員会オブザーバの可知直毅次期会長、三宅恵子氏を含む)が参加した。今回のシンポジウムでは「男女共同参画の推進：私たちの視点から国際的な視点へ」というテーマのもと、熱心な議論や交流がおこなわれた。以下にその概要を報告する。

### ◆午前の部：

#### ◇合同分科会「仕事と家庭の両立を目指して—私たちの壁であり続ける出産・子育ての乗り越え方を男女で考えよう—」

開会挨拶の後、科学技術振興機構・執行役、ダイバーシティ推進室長の渡辺美代子氏による「母として、研究者として、未来を拓く—自分を変える、社会を変える—」と題した講演があった。講演では、企業研究職に就き結婚、二人の子を出産し、その後研究組織のマネジメント職を歴任するとともに子育てに取り組んだ渡辺氏自身の経歴を振り返りながら、キャリア形成、家庭生活、育児において、転機となったことや重視されてきたことについて紹介された。キャリア形成においては、結婚後パートナーの赴任を機にカナダへ渡航されたことや、研究者としてワークライフバランスの理想と現実の隔たりに葛藤していた際に声のかかったマネジメント職へ転身したことにより、チャンスが増え広い世界が見えるようになったという経験が紹介された。また家庭生活(特に夫婦での家事の分担)や育児において、夫婦で課題を上手く分担するために重視したこと(相手を否定せず褒める)が、ひいては部下の育成にも通じるとの考えが述べられた。講演を通して、渡辺氏ご自身の行動力の高さや上司の理解、また家庭における経験が仕事のうえでも活きたこと、そしてそれらのご経験からの「人を育てることは未来の社会を創ることにつながる」というメッセージが印象的であった。

### ◇パネル討論会

#### 「話題1：出産・子育てを乗り越えるための制度、特にRPDや科研費などの現状や問題点は何か？」

渡辺美代子氏の講演の後、理化学研究所の榊原均氏、新潟大学の酒井達也氏、東邦大学の松本紋子氏が登壇し、4名によるパネル討論が行われた。東邦大の松本氏はRPDの取得者であるが、RPDの交流会が大きな励みになった一方で、支援に期限があることへの不安を述べられた。その話を受け、新潟大の酒井氏からは、RPDの支援体制にもっと柔軟さがあっても良いのではという提案があった。つまり、一人当たりの支援額はそのまま

として、年毎の資金配分や支援期間を選択できるような制度(たとえば年度あたりの資金を少なめにし、支援期間を長くする)であれば、状況に応じて所属先のPIと復帰後の研究ペースの調整ができるという点である。理研の榊原氏からは、グループディレクターという立場からご意見があった。プロジェクトを推進するなかで、出産・育児による離脱は切実な問題で、国など、より上層レベルで対処法を検討しなくてはならないのではないかと意見があった。渡辺氏からは、JSTによる「出産子育て支援制度：<http://www.jst.go.jp/gender/boshu.html>」の紹介があった。2009年にスタートしたこの支援制度は昨年時点で44名(女性36名、男性8名)が利用していると説明があり、聴講者の多くが制度自体をはじめて知ったため、会場からどよめきがおこった。

さらに産休・育休をとった研究者が所属する研究機関の支援制度について話題提供がなされた。例えばある地方大学では育休の期間中、支援金があるものの、そのお金で雇用できる人は大学院生に限られるため、もう少し柔軟性があっても良いのではという話があった。また科研費を取得してポスドクを雇用する立場の場合、産休・育休に入ると科研費を使用できなくなるため、給料が出せなくなる。企業のように、在宅勤務できればそうした問題も解決できるのだが、大学や公的研究機関では依然として取組が進んでいない。今後は研究の中断なく成果を最大限だせるようにするために、在宅勤務度の導入を本気でおこなう必要がある。いずれにしても、所属機関によって状況が異なるため、国レベルでライフイベント時の研究費の執行方法について専用の窓口を設置するなどの具体的な対応が必要である。そのためには、大学や学会が協力して働きかけをおこなう必要がある。

#### 「話題2：出産・子育てを乗り越えるための制度や理解は浸透できているのか？」

理研の榊原氏から、研究所内での事例について紹介があった。所内の保育施設の要望について、17時以降に会議やセミナーを入れないこと、宿泊が必要な仕事では保育サービスを利用できるよう改善されたという。一方、一部の大学では学生数を増やすために、教員が休日出勤を強いられることや、会議が夕方に固定されることもあり、大学と研究所では、子育てに対する配慮が大きく異なることが浮き彫りになった。こうした研究所と大学の違いは何かについて議論がなされた。大学は研究所の体制とは異なり、教員それぞれが個人商店を展開し、さらに授業をもっている。したがって、研究所や企業のようにチームとして相互援助する体制がないことが一因ではないかという。大学でこのような状況が続く以上、二人以上の出産はとても難しい状況という意見もあった。大学が研究所や企業のように、出産や子育てをしやすい環

境づくりをしていけるよう改善していくためには、多くの課題が残されている。

合同分科会の総括として、1. 支援制度提供者は利用希望者への周知を徹底させること、2. 制度利用者は改善点について主張すること、3. 研究者組織のみならず社会全体で意識改革が必要であることで締めくくられた。本会を通して主に2つのことが感じられた。1つめはRPDや子育て支援に関する制度は増えつつあり、制度の拡充自体は歓迎されるものの、当事者が置かれている状況は極めて多様であり、より柔軟な支援が望まれることである。2つめは、大学や研究機関に限らず企業においても、ワークライフバランス、出産・子育て支援に対する意識は組織により大きく異なっており、国レベルでの更なるボトムアップが望まれるということである。

(木下晃彦、佐々木晶子)

#### ◆昼の部：ポスターセッション

21の学協会と7大学・1研究機関（森林総合研究所）により男女共同参画の取り組みについて発表があり、各ポスター前で活発な議論がなされた。

大学による報告（要旨集のみの2大学を含む）の中で、多くの大学が共通して取り組んでいた支援策を以下に挙げる。

- ・女性研究者の積極的雇用と上位職への積極的登用
- ・出産・育児・介護期間中の研究支援員の雇用
- ・出産に伴うテニユアトラック期間の延長
- ・ライフイベントによる研究中断から復帰する研究者への研究費支援
- ・学内保育園・学童保育・病後児保育サポート
- ・学会参加時の保育支援制度
- ・女性研究者のリーダーシップ研修
- ・女性研究者のネットワーク形成
- ・出産・育児中の女性研究者のための国際研究交流企画
- ・女子学生のためのキャリア形成講座
- ・学長・理事長直属の「両立支援室」「男女共同参画推進部門」の設置

また、各学協会による報告（要旨集のみの学協会も含む）で印象的だったのは以下の取組である。

- ・女性研究者を対象とした学会賞の創設（日本動物学会・応用物理学会・化学工学会）
- ・男女共同参画ランチオンセミナーにおける昼食の無料提供（日本植物学会・日本生物物理学会・日本解剖学会）
- ・子育て中の研究者が参加しやすいよう年大会を学校の夏休み期間に開催（日本神経科学学会）
- ・年大会参加時の保育や介護等に関わる費用の支援（日本遺伝学会）
- ・託児室の無料化（日本農芸化学会）
- ・若手や出産育児休暇中の会員に対する学会費の減免（地盤工学会）
- ・学会誌やHPにおける男女共同参画に関する応援メッセージや事例の紹介（多数の学協会）

どの大学・学協会でも、女性研究者を積極的に支援す

る取組がなされており、日本生態学会や、学会員の職場でも、取り組み可能なものがあれば積極的に取り入れていただければと思う。ちなみに日本結晶学会では、昨年度のポスター発表で、日本生態学会の「ファミリー休憩室」を知り、早速年大会で実施したところ大変好評だったとのことである。

#### ◆午後の部：全体会議「国際的な視点から見た男女共同参画の推進」

第13期幹事学会の日本植物生理学会会長の西村いくこ氏による開会の挨拶、千葉大学学長の徳久剛史氏による歓迎の挨拶の後、総合科学技術・イノベーション会議議員の原山優子氏、内閣府大臣官房審議官大塚幸寛氏、文部科学省科学技術政策局人材政策課長柿田恭良氏による来賓挨拶があった。その後、本シンポジウムのメインテーマである「国際的な視点から見た男女共同参画の推進」に関して以下の講演・報告等がおこなわれた。

#### ◇「ドイツの男女共同参画について」Iris Wiczorek (IRIS 科学技術経営研究所代表取締役社長・ライプニッツ協会日本代表)

ドイツの科学界・産業界・政界における女性の進出と課題について報告があった。その中でドイツは日本に比して各界における女性比率は高いが、共通の問題を抱えていることが伺えた。例えば、ドイツの科学界でも年齢が上がると女性比率が低下することや、不安定なキャリアパスと雇用状況、単身赴任など高い移動性が求められることにより、30-40歳の女性研究者の70%が子どもを持ってない、などである。一方、ドイツの大学では既に男女共同参画が資金獲得のための基準となっているようで、日本でも今後同様の取組がなされることが期待される。

#### ◇「フランス CNRS の研究員経験より」小田玲子（フランスボルドー大学 CNRS 常勤研究員）

フランスボルドー大学にCNRS研究員として在籍している小田氏より、CNRSの他、フランスにおける研究組織の紹介や、フランス教育制度の紹介があった。フランス国立科学研究所（CNRS）は、人文科学を含めた広い科学分野を網羅するフランス最大の国立研究組織で、25000人の科学者・技術者がパーマネントで雇用され、赴任先は自由に選べる。全国各地にCNRSの研究所や提携大学があり、受け入れスペースがあれば、どこにでも赴任できるので、研究者夫婦の同居が可能となる。このようなCNRSの柔軟な雇用制度や、保育所・ベビーシッター料金の半額が国から補助されることなど、フランスは女性が働きやすい環境が整備されており、その結果、フランスの女性研究者比率は34%と比較的高いこと（日本は14%！）が紹介されていた。（日本でもCNRSをモデルにし、同居支援のための「バーチャル研究所制度」が男女共同参画学協会連絡会より文科省に提案されている。）

#### ◇「女性教員の増加により見えてきた効果と課題」佐々木成江（名古屋大学）

名古屋大学では、女性限定公募などの女性教員増加策が

実施された結果、理学研究科生命理学専攻で女性教員が30%を超えたそうだ。分野を絞らない・優秀な研究にこだわった公募の結果、応募者が増え、優秀な人材が確保できたこと。そして優秀な女性研究者を集めることによって、これまでにない様々な取組がなされ、組織と研究が活性化された反面、予想外の深刻な問題が生じたそうだ。それは、公募で採用した女性教員の50%が子連れ単身赴任（男性は0%なのに）をせざるを得なかったということである。子育て単身赴任教員ネットワークや家族会などのネットワークを駆使し、自助努力と相互支援で何とか乗り切っている状況だが、単身赴任手当が出ない、生活費・住居費・交通費が二倍かかる等、経済的・体力的・時間的・精神的にも限界がある。社会全体で同居支援や研究支援などのサポート体制を急ぐべきだとの提言があった（詳細は [http://scienceportal.jst.go.jp/columns/opinion/20151106\\_01.html#](http://scienceportal.jst.go.jp/columns/opinion/20151106_01.html#) を参照のこと）。また、育児→業績低下→研究費獲得の低下→負のスパイラルに陥る研究者も多いため、育児経験者には科研費等の申請書の業績欄を過去5年ではなく、過去10年にしてほしいとの提案もあった。

「数が増えてこそ、単身赴任問題のように個人の問題として片づけられない問題が浮き彫りになり、そして、自然と女性研究者や周りが解決策を探すようになる。」という佐々木氏の言葉は、声をあげる、数を増やすことの大切さを物語っている。主な国立大学では女性教員の増加策を講じているが、今後おそらく同じような問題に直面するだろう。同居支援を必要としている研究者は現在でもたくさんいる。キャリアか子どもかの二者択一ではなく、キャリアも子どもも両方選べる社会を目指して、皆で声をあげ、数を力にしていかなくてはならない。

(別宮有紀子)

## 記事

### I. 次々期会長候補及び次期代議員選挙結果について

2015年10月31日に投票を締め切り、11月4日に日本生態学会事務局において開票を行った結果、次々期会長候補および次期代議員は下記のように決定いたしました。

日本生態学会選挙管理委員会  
委員長 高原 光

総投票数 638 票

#### 1. 会長候補（任期 2018 年 3 月～2020 年 3 月）

選出	占部 城太郎	130 票
次点	湯本 貴和	102 票
	加藤 真	102 票
	宮下 直	97 票
	河田 雅圭	53 票
	その他 78 名（合計）	115 票

#### 2. 代議員（任期：2015 年 12 月～2017 年 12 月）

- 1) 全国選出の代議員（15 名）：同得票数の場合は年少者を優先します。次点者および同得票数獲得者ま

でを示しました。

	順位	氏名	所属地区会	得票数
選出	1	佐竹暁子	(北海道)	58
選出	1	吉田丈人	(関東)	58
選出	3	宮下直	(関東)	57
選出	4	湯本貴和	(中部)	54
選出	5	河田雅圭	(東北)	53
選出	6	辻和希	(九州)	52
選出	7	占部城太郎	(東北)	51
選出	8	日浦勉	(北海道)	43
選出	9	中村太士	(北海道)	41
選出	10	近藤倫生	(近畿)	39
選出	11	工藤岳	(北海道)	36
選出	12	井鷲裕司	(近畿)	34
選出	13	陶山佳久	(東北)	32
選出	13	五箇公一	(関東)	32
選出	13	相場慎一郎	(九州)	32
次点	16	酒井章子	(近畿)	31
	16	陀安一郎	(近畿)	31
	16	中野伸一	(近畿)	31

- 2) 地区選出の代議員（7 名）：選出・次点ともに、全国選出でも選出された場合は全国選出を優先し、同得票数の場合は年少者を優先します（\*）。（ ）内は得票数で、次点者および同得票数獲得者まで示しました。

北海道 (全国) 工藤岳 (8)

選出：森田健太郎 (6)

次点：赤坂卓美 (5)\* 岸田治 (5)\*

大原雅 (5)\*

東北 選出：松木佐和子 (10)

次点：鈴木まほろ (9)

関東 選出：大澤剛士 (16)

次点：瀧本岳 (15)

中部 選出：浅見崇比呂 (10)

次点：崎尾均 (8)

近畿 選出：川北篤 (7)\*

次点：大園享司 (7)\*

(全国) 近藤倫生 (7)\*

塩尻かおり (7)\* 北島薫 (7)\*

前迫ゆり (7)\*

中四国 選出：石川愼吾 (9)

次点：鎌田磨人 (8)

九州 選出：久保田康裕 (15)

(全国) 相場慎一郎 (14)

次点：竹垣毅 (8)

※代議員の辞任について

東北地区選出の松木佐和子代議員より「産休・育休のにより大学・研究業務から離れるため代議員を辞任したい」との申し出があり、代議員総会にて承認されました。これにより、東北地区選出の代議員は次点の鈴木まほろ氏となりました。

3. 投票者数及び投票率(会員数は2015年8月1日時点)

	会員数	投票者数	投票率(%)
北海道	356	56	15.7
東北	242	39	16.1
関東	1282	219	17.1
中部	520	84	16.2
近畿	694	116	16.7
中四国	271	50	18.5
九州	309	68	22.0
海外	56	6	10.7
全国	3730	638	17.1

II. 学会各賞受賞者決定

第14回日本生態学会賞

北山 兼弘(京都大学大学院農学研究所)

曾田 貞滋(京都大学大学院理学研究科)

第20回日本生態学会宮地賞

高橋 一男(岡山大学大学院環境生命科学研究所)

仲澤 剛史(国立成功大学生命科学系)

松田 一希(京都大学霊長類研究所)

第9回日本生態学会大島賞

なし

第4回日本生態学会奨励賞(鈴木賞)

立木 佑弥(九州大学大学院理学研究院)

長谷川 克(総合研究大学院大学先導科学研究科)

山尾 僚(弘前大学農学生命科学部)

III. 書評依頼図書(2015年6月~2015年11月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@mail.esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 日本土壌肥科学会編「世界の土・日本の土は今—地球環境・異常気象・食糧問題を土から見ると」(2015) 128pp. 農文協 ISBN:978-4-540-14260-4
2. 宮下直・西廣淳編「保全生態学の挑戦 空間と時間のとらえ方」(2015) 242pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060228-0
3. 大園享司著「カナディアンロッキー 山岳生態学のすすめ」(2015) 316pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-8768-871-6
4. 白山義久・赤坂憲雄編「フィールド科学の入り口 海の底深くを探る」(2015) 248pp. 玉川大学出版部 ISBN:978-4-472-18204-4
5. デイヴィッド・N・レズニック著 垂水雄二訳「21世紀に読む『種の起源』」(2015) 592pp. みすず書房 ISBN:978-4-622-07936-1
6. 清水長正・澤田結基著「日本の風穴」(2015) 300pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-6116-6
7. 宇野木早苗著「森川海の水系 —形成と切断の脅威」(2015) 334pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1569-0

8. 永田信著「林政学講義」(2015) 170pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-072065-6

9. 国連環境計画(UNEP)編「GEO-5 地球環境概観第5次報告書上」(2015) 2090pp. 一般社団法人環境報告研 ISBN:978-4-9907839-0-7

IV. 寄贈図書

1. 「海洋地質図 No.85 (DVD) 沖縄県北部周辺海域海洋地質図」(2015) DVD 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
2. 「海洋地質図 No.86 (DVD) 室蘭沖表層堆積図」(2015) DVD 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
3. 「うみうし通信 No.88」(2015) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
4. 「鹿島学術振興財団 第39回 2014年度年報」(2015) 348pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
5. 「公益財団法人下中記念財団 2015年報」(2015) 90pp. 公益財団法人下中記念財団
6. 「山田科学振興財団 第38回事業報告書」(2015) 148pp. 公益財団法人山田科学振興財団
7. 「うみうし通信 No.89」(2015) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所

V. 地区会報告

北海道地区会

2014年度地区会報告(2014年4月1日~2015年3月31日)

(1) Joel Cohen 教授講演会を後援した

開催日:2014年10月14日(火)17時から18時

開催場所:北海道大学大学院地球環境科学研究院 D201

(2) 北海道若手生態学研究会を共催した

開催日:2015年2月14日(土)9時30分から17時

開催場所:北海道大学大学院地球環境科学研究院 D101

(3) 2014年度北海道地区会大会を開催した

日時:2015年2月20日(金)10時から16時40分

場所:北海道大学 環境科学院/地球環境科学研究院 講義室 D201

参加者:65名

【若手の部】

「異種間交雑によって在来アメマスは外来カワマスに置き換わるのか」福井翔(北大・環境科学)・Shannan May-McNally(UBC)・小泉逸郎(北大・地球環境)

「北海道東部地域におけるオジロワシの繁殖成績と潜在的営巣地の推定」吉田賢(東京農業大学大学院)・白木彩子(東京農業大学)

「岩礁潮間帯の固着生物群集における季節動態の潮位による違い」金森由妃(北大・院・環境科学)・深谷肇一(統数研)・野田隆史(北大・地球環境)

「砂礫性昆虫によって維持される森と川のつながり~礫河原への植生侵入の影響の検証~」植村郁彦・根岸淳二郎(北大院・環境)・照井慧・中村太士(北大院・農)

「一シーズンに複数回繁殖を行うのはどのような個体

か？個体の質と繁殖への投資配分の関係」乃美大佑（北大・環境科学）・油田照秋・小泉逸郎（北大・地球環境科学）

「土地の節約か共有か？都市の形状が生物多様性に及ぼす影響」曾我昌史（北大・農）・山浦悠一（北大・農）・小池伸介（農工大・農）・Kevin J. Gaston（エクセター大）

「The ecological impacts of wind power and photovoltaics - with a focus on Japan -」Lea Vegh（北大・環境科学院）

「気候変動によって失われる文化的サービス：湿原のトンボはおいくら？」宇久村三世（北海道札幌旭丘高等学校生物部2年）

「高山植物群落におけるハチ類とハエ類の季節的訪花パターン、ならびに結実成功の比較」水永優紀（北大・環境科学院）

「Patterns of branch growth and death in the crowns of Sakhalin Spruce, *Picea glehnii* (F.Schmidt) Mast.」Chen Lei（北大・環境科学院）・隅田明洋（北大・地球環境科学）

「Leaf-trait variation across and within tree species in peat swamp and heath forest in Kalimantan」Doddy Juli Irawan（北大・環境科学院）

「同所的に生息する3種の野ネズミにおけるドングリ中のタンニンに対する耐性能力の比較」小野寺緑也・秋元佑香（北大・環境科学院）・島田卓哉（森林総研）・齊藤隆（北大FSC）

「都市化が警戒心の季節性を減少させる：エゾリスでの逃避距離を用いた検証」内田健太（北大・環境科学院）・鈴木圭・寫本樹（岩大院連農）・柳川久（帯畜大）・小泉逸郎（北大・環境科学院）

#### 【一般の部】

「人間生活空間に侵入したタイリクヤチネズミとエゾトガリネズミは衛生動物と見なしえるか」浅川満彦（酪農学園大学）・外平友佳理（到津の森公園）

「移入ポテンシャルが局所環境—魚類個体数の関係におよぼす波及効果：小規模自然再生への示唆」照井慧（北大農）・宮崎佑介（神奈川県博）

「若手の部」では13件、「一般の部」では2件の発表があった。「若手の部」発表者の中から5名の審査員による判定の結果、曾我昌史（北大・農）、小野寺緑也（北大・環境科学）、内田健太（北大・環境科学）の3名に賞状および副賞を授与した。

(4) 2014年度（平成26年度）北海道地区会総会を開催した。

日時：2015年2月20日（金）10時から16時40分  
場所：北海道大学 環境科学院 / 地球環境科学研究院 講義室 D201

審議の結果、以下の3点が承認された。

- 1) 露崎庶務幹事より庶務報告がなされ承認された。
- 2) 野田会計幹事より会計報告がなされ承認された。
- 3) その他  
法人化に伴う日本生態学会会計制度改定に伴い、地区大会における会計監査が不要となった。これに合わせた地区会会則の改定が総会参加者の2/3

以上の承認を得て改定が承認された。

生態学会全国大会を2018年に北海道地区が担当することが了承された。

全国自然保護委員会から、北海道地区会に関連する部分の報告があり、了承された

今後の地区大会のあり方について改善案を考慮中であることが報告され、了承された。

#### 東北地区会

(1) 東北地区会第59回大会を開催

公開講座「変わりゆく東北の自然と生き物の応答—ミジンコから森林まで—」

開催日：2014年12月13日

会場：いわて県民情報交流センター（アイーナ）

「山地の生態系におよぼす気候変動の影響」中静透（東北大）

「ミジンコは語る：多様な生態と生き方」占部城太郎（東北大）

研究発表会

開催日：2014年12月14日

会場：岩手大学 総合教育研究棟

「農耕地帯で繁殖するチュウヒの狩り場環境選択—秋田県八郎潟干拓地の事例—」高橋佑亮（岩手大学大学院農学研究科）・東淳樹（岩手大学農学部）

「トウホクノウサギの生息地選択—非積雪期の北上高地において—」工藤寛・東淳樹（岩手大学農学研究科）

「飼育下ゴマフアザラシ（*Phoca largha*）の繁殖オスの同定」中川優梨花（山形大学理工学研究科）・玉手英利（山形大学理学部）

「倒木上のコケがトウヒ実生の更新に与える影響」安藤洋子・深澤遊（東北大学農学部）・大石善隆（信州大学農学部）

「仙台市東緑の砂浜海岸エコトーンにおける植生の動態と保全・修復活動」平吹喜彦（東北学院大学）・原慶太郎・富田瑞樹（東京情報大学）・西廣淳（東邦大学）・岡浩平（広島工業大学）・菅野洋・杉山多喜子・滝口政彦（宮城植物の会）

「水田の大型動物モニタリングにおける市民調査手法の有効性の検討」向井康夫・鈴木朋代・牧野渡・占部城太郎（東北大院・生命）

研究発表の部には「若手研究発表賞」が設けられ、大会参加者からの投票に基づき、最優秀賞が安藤洋子氏（東北大学農学部）へ、優秀賞が中川優梨花氏（山形大学理工学研究科）、工藤寛氏（岩手大学農学研究科）、高橋佑亮氏（岩手大学大学院農学研究科）へ、それぞれ授与された。

研究相談会

開催日：2014年12月14日

会場：岩手大学 総合教育研究棟

「ドジョウを対象とした育苗箱施用殺虫剤4剤の生態毒性評価試験」宮井克弥・神宮字寛（宮城大学食産業学研究科）

「同所的に出現する *Daphnia pulex* 2 個体群の共存機



構を採る」八巻健有・牧野渡・占部城太郎（東北大院・生命）

「復旧工事の進む福島県相馬市松川浦に設けられた希少種保全エリアの植生と植物相」渡邊祐紀（福島大・院・共生システム理工）・黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「次世代シーケンシング分析による絶滅危惧植物レブンアツモリソウの集団遺伝学的解析」伏見愛雄（東北大・農）・松木悠（東北大・農）・河原孝行（森林総研）・高橋英樹（北大・総合博）・伊澤岳師（北大・農）・陶山佳久（東北大・農）

「ネムノキの中央花の機能を探る」加藤沙織（福島大・共生システム理工）・水澤玲子（福島大・人間発達文化）・黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「カバノキ属樹木2種の春葉と夏葉の表面上に見られる腺毛の比較」立田葉那・松木佐和子（岩手大学農学部森林保全生態学研究室）

「山岳上部におけるミズナラの葉形態と生態の変異」増井悠人（弘大農生・院）・石田清（弘大農生）

「成木と子個体の空間分布は同所的か、排他的か—優占度の異なる落葉広葉樹数種の比較—」佐々木崇徳（東北大学農学部）・清和研二（東北大学大学院農学研究科）

「落葉広葉樹成木下における同種実生から他種実生への置き換わりの程度—優占度の異なる4種の比較—」鈴木綾・清和研二（東北大学大学院農学研究科）

「ブナ・ミズナラ幼樹の生態と春先の環境要因」平松咲子・石田清（弘前大学農学生命科学部）

「多雪地におけるブナ（*Fagus crenata*）の年輪幅に影響する気象要因」名取史晃（弘前大学大学院農学生命科学研究科）・石田清（弘前大学農学生命科学部）

「クスサン（*Caligula japonica*）の個体数変動に影響を与える生態ニッチ要因解析」尾森翔（岩手大学農学部森林保全生態学研究室）

## (2) 地区委員会報告

2014年度定例地区委員会は2014年12月13日に岩手県立大学アイーナキャンパス（盛岡市）において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の13名であった。占部城太郎（地区委員長）、石田清、杉山修一、鈴木まほろ、松木佐和子、松政正俊、鈴木孝男、陶山佳久、中静透、兼子伸吾、島田直明（岩手県立大学、オブザーバー参加）、小口理一（会計幹事）、牧野渡（庶務幹事）

### <報告事項>

#### ・庶務報告

- 1) 2014年2月28日：日本生態学会東北地区会会報74号を発行した。
- 2) 2014年7月29日：7月25日に締め切られた地区委員選挙（選挙管理委員：千葉聡氏、牧野渡氏）の結果、以下の21名が選出された（任期：2014年8月1日～2016年7月31日）。  
青森県：東信行・石田清・杉山修一（次点：佐

原雄二・山岸洋貴）

岩手県：鈴木まほろ・松木佐和子・松政正俊（次点：東淳樹・柴田銃江）

宮城県：占部城太郎・彦坂幸毅・中静透・黒川紘子・鈴木孝男・陶山佳久・酒井聡樹・清和研二・千葉聡（次点：河田雅圭・鹿野秀一）

秋田県：蒔田明史・星崎和彦（次点：井上みずき）

山形県：富松裕・玉手英利（次点：林田光祐）

福島県：黒沢高秀・兼子伸吾（次点：鈴木和次郎）

- 3) 2014年8月1日：地区委員の互選の結果、地区委員長に占部城太郎氏（東北大学）が選出された。また、地区委員長の委嘱により、庶務幹事を牧野渡氏（東北大学）、会計幹事を小口理一氏（東北大学）が引き受けることになった。
  - 4) 2014年8月26日：一般社団法人日本生態学会事務局から、専務理事陶山佳久名で、今後地区会会計を管理していくゆうちょ銀行の口座（新口座と記す）ができた旨の連絡が届いた。
  - 5) 2014年10月2日：第59回地区大会及び総会の案内を発送した（岩手県）。
  - 6) 2014年12月4日：地区会会計を従来の口座（七十七銀行）から新口座へ移管した。
  - 7) 2014年12月8日：第59回地区大会のプログラムを発送した（岩手県）。
  - 8) 2014年12月13日：いわて県民情報センター（アイーナ）において地区委員会および公開講座（兼岩手生態学ネットワーク第12回市民講座）を行った。
  - 9) 2014年12月14日：岩手大学総合教育研究棟において第59回地区大会および総会を行った。
- ・会計報告  
2013年度決算と会計監査、2014年度中間報告ならびに今後の執行見込みについて報告があり、了承された。
  - ・岩手生態学ネットワーク報告  
代表の松政正俊氏から、これまでの活動報告がなされた。また今回の地区大会公開講座が岩手生態学ネットワーク主催の市民講座を兼ねる旨説明がなされた。
  - ・第63回全国大会（2016年）準備状況報告  
占部地区委員長（大会実行委員長）から、日程（2016年3月20～24日）、会場（仙台国際センターおよび仙台市情報/産業プラザ）、各種委員会および発表スケジュールの概要、公開講演会題目と発表者、懇親会会場（仙台国際ホテル）について説明があった。
- ### <審議事項>
- ・地区委員の変更  
黒川委員（宮城県から転出）の後任については、転出時期が任期の1年目以内であったことから、地区会選挙細則に従い次点の会員が繰り上げ当選となることが説明され、了承された。宮城県の次点会員は2名であったことから、地区会選挙細則に従い、河田雅圭氏を繰り上げ当選とした。

- ・会計監事の推薦  
地区委員会新執行部の会計監事として、鹿野秀一氏（東北大学）が推薦され、了承された。
  - ・次回、次々回開催地  
次回大会を秋田県で開催することが、昨年度地区委員会の決定事項に基づいて了承された。次々回大会は山形県での開催となることが了承された。
  - ・2015年度予算  
2015年度予算について説明がなされたが、学会法人化を契機として、今後の地区大会開催のための予算を上限15万円とすること、地区会報をpdf化することで経費節減を図ることが議論され、一部修正を加えた上で承認された。
  - ・地区会報のpdf化  
従来冊子体で発行されていた地区会報をpdf化し、メール配信とすることが決定された。紙媒体の地区会報の配布を希望する会員には別途印刷して送付することとなった。
- (3) 地区委員会報告  
2014年度東北地区会総会は、2014年12月14日に岩手大学農学部にて開催され、総会議長に松木佐和子氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。
- ・地区委員会における庶務報告および会計報告が了承された。
  - ・岩手生態学ネットワークの活動について報告がなされた。
  - ・第63回全国大会（2016年）の準備状況について報告がなされた。
  - ・2015年度予算案が原案どおり承認された。
  - ・次回地区大会を秋田県で行うことが承認された。

## 関東地区会

2015年（1月-12月）活動報告

- (1) 2015年1月24日（土）に東京大学農学部1号館8番講義室において、関東地区会公開シンポジウムを開催した。
- テーマ：「5分で伝える力 生態学ライトニングトーク」  
企画者：大澤剛士・馬場友希（農環研）・大西尚樹（森林総研）
- 企画趣旨：「自分の研究を人に伝える技術は、時として研究内容そのものと同じくらい重要になります。今回のシンポは、プレゼンによる「伝える技術」に注目して、「生態学ライトニングトーク」を行います。ライトニングトークとは、ショートトークとも呼ばれる5分間のプレゼンです。Lightning（稲妻、電光石火）から取っていることからわかる通り、短時間でインパクトのある話をするのが基本コンセプトになっています。5分間という限られた時間で、自分の大胆なアイデアを提示したり、始めたばかりの実験デザインを紹介したり、最近出版した論文を宣伝したり、生態学のトピックを自由に話してください。それをきっかけに、休憩時間や懇親会で深い議論を交わしましょう。国際生態学会 INTECOL

においても5分トークは正式セッションとして実施されており、限られた時間内で多くのトピックが聞けるという利点から多くの聴衆を集める人気セッションでもあります。自分をアピールし、知り合いを増やして講演後の議論を楽しみましょう。」

### 【プログラム】

- 大澤剛士（農環研）趣旨説明  
大西尚樹（森林総研）基調講演「プレゼンのためのトーク術」  
馬場友希（農環研）「ヤミサラグモ：「錠と鍵」が織りなす種分化と多様性」  
大澤剛士（農環研）「生物多様性情報学のススメ」  
大西尚樹（森林総研）「九州最後のクマは本州産」  
原口岳（森林総研）「研究計画：人為攪乱の歴史が森林の生物多様性にもたらす影響」  
須藤正彬（農環研）「群集生態学はアクションゲームになりますか？」  
森洋佑（野生動物保護管理事務所）「シカ影響を植物で測るには？」  
西嶋翔太（横浜国立大学）「アメリカザリガニはなぜ水草を切断するのか？」  
鈴木美季（筑波大学）「動物の行動様式の種間差が植物-動物間相互作用にどのように影響するのか？」  
伊川浩樹（農環研）「昆布のCO<sub>2</sub>吸収について」  
沼尻侑子（筑波大学）「朱に交わるは黒色体 一宿主はアカイロマメゾウムシ」  
安河内彦輝（東京大学）「ヒトの薬を代謝する酵素はどのように進化してきたのか？」  
高橋大輔（農環研）「食う食われる関係の進化と不安定」  
和田慎一郎（森林総研）「お米に文字を書けますか？」  
朝田景（農環研）「土壌有機物動態モデルの改良に向けた微生物バイオマスCNP組成比のパラメタリゼーション」  
瓜生真也（横浜国立大学）「生態学者がGitを使うべき理由」  
友澤森彦（慶応大学法学部）「三宅島のアカネズミはなぜ黒いのか？」  
須貝杏子（森林総研）「種苗配布区設定のための遺伝解析がもたらすと期待すること」  
福島友滉（東京大学）「農薬散布後の水田における害虫類の個体数に景観構造が及ぼす影響」  
香月雅子（筑波大学）「外見から想像する」
- (2) 2015年8月6日（木）に東京大学駒場キャンパス11号館において、関東地区会公開シンポジウムを開催した。
- テーマ：「非ガウス性／非線形性／非対称性からの因果推論手法：その使いどころ・原理・実装を学ぶ」  
企画者：林岳彦（国立環境研究所環境リスク研究センター）、津田真樹（テクノスデータサイエンス・マーケティング株式会社）
- 【プログラム】  
林岳彦（国立環境研究所環境リスク研究センター）「進化生態学者のための前口上：フィッシャー、ライト、因果推論」

大塚淳 (神戸大学大学院人文学研究科) 「哲学から見た「因果」概念のレビュー」

清水昌平 (大阪大学産業科学研究所) 「非ガウス性を利用した因果構造探索」

尾崎 隆 (株式会社リクルートコミュニケーションズ) 「Granger 因果による時系列データの因果推定」

中山新一朗 (中央水産研究所) 「Convergent cross mapping の紹介と実践：決定論的力学系における因果関係推定」

今井徹 (ALBERT) 「非線形な関係を捉える各種指標 (MIC 等) について」

黒木学 (統計数理研究所)・久保拓弥 (北海道大学)・伊庭幸人 (統計数理研究所) 「コメンテーターからのコメント」

総合議論

- (3) 2015 年 9 月 5 日 (土) に東京大学農学部 1 号館 8 番教室において、関東地区会公開シンポジウムを開催した。

[テーマ] 「気候変動と生物のレンジシフト」

Biological range shifts in response to climate change

[企画者] 宮下直 (東京大学農学生命科学研究科)

[プログラム]

宮下直 (東京大学) 開会挨拶

Chris D. Thomas (University of York) "Species range shift under climate change and management implications for conservation"

松葉史紗子 (東京大学) "Forecasting distributions of butterflies and implications for conservation"

深澤圭太 (国立環境研究所) "Trait-based prediction of breeding site dispersal under global change: can migratory birds move farther?"

大橋春香 (森林総合研究所) "Additive effect of climate change and land abandonment may accelerate range expansions of Sika deer"

熊谷直喜 (国立環境研究所) "Degradation of seaweed beds and expansion of coral reefs in Japanese subtropical rocky habitats under current and near-future climates"

河田雅圭 (東北大学) "Genetic factors limiting the range expansion in butterflies and damselflies"

久保田涉誠 (日本大学 / 東京大学) "Genome-wide search for genes responding to environmental changes"

総合議論

- (4) 2015 年 12 月 12 日 (土) に首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパスにおいて、関東地区会公開シンポジウムを開催した。

テーマ: 「メタ解析から探る、植物—動物間相互作用研究の新展開 (1)」

企画者: 内海俊介 (北海道大学)、山尾僚 (弘前大学)、鈴木美季 (筑波大学)、塩尻かおり (龍谷大学)、入谷亮介 (九州大学)

企画趣旨: 植物—動物間相互作用がもたらす形質進化は、生態学や進化学における主要なテーマの一つとして、昔から盛んに研究が行われてきました。近年では、個別の相互作用系の枠組みを越えて、動植物

の戦略や生態系全体をより包括的に理解しようという気運が高まっています。しかしながら、これまでに報告された膨大な事例を前にすると、大量のデータをどのように解析してまとめたら良いのか、途方に暮れてしまいます。そこで本集会では、4 人の研究者をお招きし、メタ解析を活用した研究について紹介していただきます。

【プログラム】

開会挨拶

吉川徹朗 (森林総合研究所) 「鳥類 - 植物間における相利 / 敵対関係の混合ネットワーク: 市民データの解析から」

佐藤拓哉 (神戸大学) 「食物網の隠れたエネルギー流? — 宿主操作を介した捕食—被食関係の変化」

瀧本岳 (東京大学) 「食物連鎖の長さを決める環境要因をメタ解析でさぐる」

高木俊 (兵庫県立 人と自然の博物館) 「草食獣が植食性昆虫に与える影響のメタ解析: 既存研究の傾向とバイアスを探る」

中部地区会

- (1) 平成 27 年度 (2015 年度) 中部地区会大会及び総会を開催

平成 27 年度総会及び中部地区会大会を開催

開催日時: 平成 27 年 10 月 24 日 12:00 ~ 17:00 (総会及び大会: 高山市民文化会館)

25 日午前中 (エクスカーション: 岐阜大学高山試験地) 総会 (12:00 ~ 13:00) の出席者及び主な審議事項は次の通りである。

・出席者: 大塚俊之・斎藤琢・吉竹晋平・山下寿之・石井博・横畑泰志・和田直也 (以上 7 名)

・報告事項として、助成金活動が紹介された。今年度は 3 件の応募があり、厳正なる審査の結果、以下に示す 3 件の研究課題が採択された。

1) 「地下生種を含めたオサムシ科ナガゴミムシ属の分子系統解析」小粥隆弘 (筑波大・院・生命環境 D3)

2) 「揮発性物質を介した植物間コミュニケーションの影響」太刀川翼 (新潟大・院・自然環境 M2)

3) 「誘導抵抗性を介して初期食害が葉上の植食者相に与える影響」古谷祐平 (新潟大・院・自然環境 M2)

・学会法人化に伴い、学会事務局の監査方法が変更になり、地区会の事実上の会計監査が事務局により実施されるようになった。この変更に伴い、地区会の役員に会計監査を置く現会則 (第五条第三項) を改訂し、今後は会計監査担当者を置かないことにした。

但し、地区会の会計については、毎年度総会で報告することを確認した。

・会計担当の石井博氏より、平成 27 年 10 月 20 日現在までの会計報告があった。

・大学院生や若手研究者等を対象とした研究助成制度案が示され、次年度も引続き実施することが了承された。

- ・中部地区会費については、次年度も徴収しないことで意見が一致した。
  - ・次回の中部地区会大会について、これまでに実施していない大学等を開催候補地として今後検討することとなった。
  - ・次年度で任期を迎える地区会長及び役員について、意見交換を行った。
- 総会終了後、研究発表会(13:00～17:00)が行われた。参加者は39名であり、2題の口頭発表と20題のポスター発表があった。発表プログラムは以下の通りである。

#### 講演会

- 1) 特別講演「白山山麓の大白川ブナ-ミズナラ原生林」大塚俊之・Suchewaboripont Vilanee・吉竹晋平(岐阜大)
- 2) 特別講演「冷温帯における生態系機能とその気候変動応答」斎藤琢(岐阜大)

#### ポスター発表会

- 1) 「Fluxes and concentration of dissolved organic carbon in a cool-temperate deciduous forest, central Japan」Siyu Chen, Shinpei Yoshitake, Ohtsuka Toshiyuki(岐阜大)
- 2) 「出光興産(株)愛知製油所グリーンベルトに生息する小型哺乳類の糞中植物残渣からの餌資源推定」藤井太一・川本宏和・白子智康・上野薫・南基泰(中部大院)・橋本良樹(出光興産)
- 3) 「北アルプス太郎山におけるニホンライチョウの糞中植物残渣からの餌資源推定」橋本知英・加賀春香(中部大)・藤井太一・上野薫・南基泰(中部大院)
- 4) 「北信州の里山資源“ブナ”の実を活用した、地域活性化の可能性の検討」井田秀行・高峰禎子・福田典子・蛭田直(信州大)
- 5) 「立山弥陀ヶ原の池塘及び植生分布の季節変化をUAVから評価する」嘉義由梨佳・佐澤和人・和田直也(富山大)
- 6) 「誘導抵抗性を介して初期食害が葉上の植食者相に与える影響」古谷祐平・太刀川翼・石崎智美(新潟大院)
- 7) 「山梨県周辺におけるシダ植物分布境界のスケーリング解析」松浦亮介・佐藤利幸(信州大院)
- 8) 「春植物カタクリのフェノロジーに影響を及ぼす気象要因」宮崎貴文(富山大院)・町田有見・浦山亜由美・浦野智裕・和田直也(富山大)
- 9) 「ミシシippアカミミガメによるイネの食害に関する国内初の記録」村瀬亮太・村瀬涼介・白川真衣・中村真之・座間哲平・加藤英明(静岡大)
- 10) 「北アルプス立山山頂におけるハイマツの伸長成長モニタリング ―再測定精度の検証と経年変化の検出―」仲田真理・和田直也(富山大)
- 11) 「サワラ天然大径木のポリゴン年輪解析」中野雄太・石田仁(岐阜大院)
- 12) 「森林における地上性シダ植物の分布傾向と林冠の植生との対応について」大杉周・佐藤利幸(信

州大院)

- 13) 「気化学的遺伝毒性試験法を用いた加熱土壌の遺伝毒性評価と発現条件に関する研究」佐澤和人・和田直也(富山大)・倉光英樹(富山大院)
  - 14) 「東海丘陵要素植物ヘビノボラズ分子系統地理学的解析」嶋村起志・南基泰(中部大)・渥美聡孝(九州保健福祉大)
  - 15) 「林床ササ群落の有無が落葉広葉樹二次林の炭素循環に与える影響」蘇米雅・飯村康夫・吉竹晋平・大塚俊之(岐阜大)
  - 16) 「揮発性物質を介した植物間コミュニケーションの影響」太刀川翼・古谷祐平・石崎智美(新潟大院)
  - 17) 「第3の花の存在がマルハナバチの無報酬花の学習に与える影響」辻本翔平・徳江誠・石井博(富山大院)
  - 18) 「火山性ガスが高山植生に及ぼす影響の評価～UAVを用いた立山地獄谷周辺のリモートセンシング～」吉松美咲・佐澤和人・和田直也(富山大)
  - 19) 「冬と夏の温暖化が草原のリター分解に及ぼす影響」吉竹晋平(岐阜大)・小泉博(早稲田大)・大塚俊之(岐阜大)
  - 20) 「伊豆市に分布域を広げたアムールハリネズミ」座間哲平・中村真之・村瀬涼介・村瀬亮太・白川真衣・安立真一郎・加藤英明(静岡大)
- ポスター賞に応募のあった12名中、次に示す2名が「優秀ポスター賞」に選ばれ、表彰が行われた。太刀川翼(新潟大学大学院自然科学研究科) 辻本翔平(富山大学大学院理工学教育部) また、翌日のエクスカッション(岐阜大学高山試験地)には16名が参加した。

#### 近畿地区会

- (1) 2015年度第1回地区会委員会  
日時：2015年6月13日(土)  
会場：I-site なんば(大阪府立大学)  
議事：1) 2015年度事業計画案：公募集会の募集、第2回地区会例会 2) 2014年度会計報告と2015年度会計予算案 3) 選挙・次期会長および事務局について 4) 近畿地区会第20回奨励賞の選考
- (2) 2015年度近畿地区会総会  
日時：2015年6月13日(土)  
会場：大阪府立大学中百舌鳥キャンパス  
議事：1) 2015年度事業計画案 2) 2014年度会計報告と2015年度会計予算案
- (3) 2015年度第1回例会  
日時：2015年5月31日(土)  
会場：I-site なんば(大阪府立大学)  
第19回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(矢代敏久氏、増田圭祐氏、山田直季氏)  
一般発表
- 1) 「好気的環境において熱帯マメ科植林地土壌からの亜酸化窒素放出量にリン添加が及ぼす影響」森大喜<sup>1</sup>・太田誠一<sup>1</sup>・石塚成宏<sup>2</sup>・根田遼太<sup>1</sup>・Wicaksono

Agus<sup>3</sup>、Heriyanto Joko<sup>3</sup> (1京大院農、2森林総研、<sup>3</sup>MHP)

- 2) 「クモの網を操るハチ —ニールセンクモヒメバチによるクモの行動操作の起源と機能」高須賀圭三<sup>1</sup>・安井知己<sup>2</sup>・石神徹<sup>2</sup>・中田兼介<sup>3</sup>・松本吏樹郎<sup>4</sup>・池田健一<sup>1</sup>・前藤薫<sup>1</sup> (1神戸大院・農、<sup>2</sup>神戸大院・工、<sup>3</sup>京都女子大、<sup>4</sup>大阪自然史博)
- 3) 「REDD+ 実現に向けたボルネオ熱帯降雨林におけるリモートセンシングを用いた生物多様性可視化技術の開発」藤木庄五郎・田中厚志・青柳亮太・今井伸夫・鮫島弘光・北山兼弘 (京大院・農・森林生態)
- 4) 「シロアリの繁殖分業と脂肪体特異的な核 DNA 量の倍化」野崎友成・松浦健二 (京大院・農・昆虫生態)
- 5) 「協同繁殖するシクリッドでは捕食圧が子の分散を制限する」田中宏和・Joachim Frommen・高橋鉄美・幸田正典 (大阪市大院・理・動物機能生態)
- 6) 「ヒゲトハネカクシ亜科内における好白蟻性種の進化 (甲虫目: ハネカクシ科)」金尾太輔<sup>1</sup>・丸山宗利<sup>2</sup> (1京都大・人環、<sup>2</sup>九州大・博)
- 7) 「実生の保護者、知られざるタヌキの役割—タヌキの溜糞場はシカから実生を守る植物のレフェュージャ—」長野秀美・福本繁・高柳敦 (京大院・農・森林生物)
- 8) 「琵琶湖に定着した侵略的外来水草オオバナミズキンバイ (広義) は亜種ウスゲオオバナミズキンバイである—その分類と生活史特性—」稗田真也<sup>1</sup>・金子有子<sup>2</sup>・中川昌人<sup>3</sup>・野間直彦<sup>1</sup> (1滋賀県大院・環境科学、<sup>2</sup>滋賀県琵琶湖環境科学研究センター・東洋大学文学部、<sup>3</sup>岡山県農林水産総合センター生物科学研究所)
- 9) 「ボルネオの木材生産林における樹木組成: マレーシア・インドネシアにおける広域調査」青柳亮太・藤木庄五郎・今井伸夫・鮫島弘光・田中厚志・北山兼弘 (京大院・農・森林生態)
- (4) 2015 年度「公募集会」の選考  
公募集会の募集を6月30日-7月31日に行い、応募のあった公募集会3件について選考委員会による選考の後、近畿地区委員会に選考結果を諮り、9月1日付で公募集会3件への助成が承認された。
- (5) 2015 年度第2回地区会委員会・例会 (予定)  
日時: 2015年12月19日 (土)  
会場: I-site なんば (大阪府立大学)  
地区会委員会  
第20回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式 (高須賀圭三氏、田中宏和氏、長野秀美氏)  
一般発表  
1) 「熱帯林拡大過程における種子散布過程の重要性」藤田知弘 (京大院アジア・アフリカ地域研究)  
2) 「シカによる森林の下層植生の衰退がマルハナバチ訪花植物の繁殖成功に与える影響」坂田ゆず<sup>1</sup>・山崎理正<sup>2</sup> (1京大生態研、<sup>2</sup>京大院・農)  
3) 「熱帯植林地におけるリン施肥が土壌および葉の塩基類濃度に及ぼす影響」森大喜・根田遼太 (京

大院農)・石塚成宏 (森林総研)・Wicaksono Agus・Heriyanto Joko (MHP)

- 4) 「東南アジア熱帯林において一斉開花現象がもたらす栄養塩循環の年変動」青柳亮太・今井伸夫・鮫島弘光・北山兼弘 (京大院・農・森林生態)
- 5) 「UAVを用いた熱帯樹木3次元構造の測定技術開発」藤木庄五郎・青柳亮太・今井伸夫・北山兼弘 (京大院・農・森林生態)
- 6) 「水生植物ヒメガマの種子休眠・発芽特性における集団間変異」倉園知広・角野康郎 (神戸大院・理・生物)
- 7) 「ボルネオ島熱帯林の野外 NP 施肥実験から見る樹木のリン獲得源としての多様な土壌有機態リンの役割」横山大稀 (京大・森林生態)・今井伸夫 (京大・霊長研)・北山兼弘 (京大・森林生態)
- 8) 「複数の経路で導入されている他殖性ドクムギ属の砂浜への分布拡大プロセス」樋口裕美子・下野嘉子・富永達 (京大院・農)
- 9) 「超寄生者のエビヤドリムシがカクレガニを通して宿主のカキ類の繁殖に与える影響」安岡法子・遊佐陽一 (奈良女子大院・人間文化)
- 10) 「土壌窒素・リン可給性の空間的变化が屋久島森林生態系の細根生産に及ぼす影響」向井真那<sup>1</sup>・相場慎一郎<sup>2</sup>・北山兼弘<sup>1</sup> (1京大農、<sup>2</sup>鹿大理工)

#### 中国四国地区会

(1) 第59回中国四国地区大会 (2015年5月16, 17日, 於: 愛媛大学)

【ポスター発表】 (5月16日)

「日本の森林において攪乱が樹木の $\alpha$ および $\beta$ 多様性に与える影響」石原正恵 (広島大・院・国際協力)

「岡山県瀬戸内市前島における森林の歴史—侵入年代と生長過程—」浅野快<sup>1</sup>・上田博樹<sup>1</sup>・太田謙<sup>2</sup>・波田善夫<sup>1</sup> (1岡山理大・生地、<sup>2</sup>岡山理大・自然植物園)

「高知県物部川の砂礫堆における樹林伐採後の植生変化」築地孝典<sup>1</sup>・比嘉基紀<sup>2</sup>・石川慎吾<sup>2</sup> (1高知大・院・総合人間自然・理、<sup>2</sup>高知大・理・生物)

「高知市皿ヶ峰における草原生植物の刈り取りによる回復過程」高橋瑛乃<sup>1</sup>・比嘉基紀<sup>2</sup>・石川慎吾<sup>2</sup> (1高知大・院・総合人間自然・理、<sup>2</sup>高知大・理・生物)

「鳥取県東部におけるシカの採食による植生の被害状況」川嶋淳史・永松大 (鳥取大・地域)

「鳥取砂丘に隣接する多鯉ヶ池の環境条件と植物群落」土江美実・永松大 (鳥取大・地域)

「モンゴル草原に生育する低嗜好性雑草 *Artemisia adamsii* の高CO<sub>2</sub>応答」大林慎太郎、衣笠利彦 (鳥取大・院・農)

「モンゴル南部における積雪と野生草食獣モウコガゼルの生息適地の年変動」坂本有実<sup>1</sup>・伊藤健彦<sup>2</sup>・Lhagvasuren B<sup>3</sup>・衣笠利彦<sup>1</sup>・恒川篤史<sup>2</sup>・篠田雅人<sup>4</sup> (1鳥取大・院・農、<sup>2</sup>鳥取大・乾地研、<sup>3</sup>モンゴル科学アカデミー、<sup>4</sup>名古屋大・院・環)

「四国地域におけるカモ類の個体数の年次変動—特

にレッドリスト掲載種の近年の動向について—佐藤重穂<sup>1</sup>・濱田哲暁<sup>2</sup>・谷岡仁<sup>3</sup> (<sup>1</sup> 森林総研四国, <sup>2</sup> 東洋電化テクノロジーサーチ, <sup>3</sup> 日本野鳥の会高知)

「ダムとオショロコマの頭部形態の関係性」斎藤壮央<sup>1</sup>・竹川有哉<sup>1</sup>・河口洋一<sup>2</sup> (<sup>1</sup> 徳島大院・先端技術, <sup>2</sup> 徳島大院・STS)

【口頭発表】(5月17日)

「仁淀川水系における移入イワナの分布」市守大介、阿部博文、井上幹生 (愛媛大・院・理工)

「愛媛県今治市におけるカスミサンショウウオ (*Hynobius nebulosus*) の繁殖期における基礎的情報」板野賢大<sup>1</sup>・藤原陽一郎<sup>2</sup>・池内和也<sup>2</sup>・大森浩二<sup>3</sup> (<sup>1</sup> 愛媛大・院・理工, <sup>2</sup> 特定非営利活動法人愛媛生態系系保管理, <sup>3</sup> 愛媛大・沿岸環境科学研究センター)

「高緯度域における粗放的なわばり性スズメダイのサンゴ群集への影響」増原碩之・畑啓生 (愛媛大・院・理工)

「タンガニカ湖に生息する *Tropheini* 族藻食シクリッドにみられる機能形態の多様化」多田真也<sup>1</sup>・堀道雄<sup>2</sup>・山岡耕作<sup>3</sup>・畑啓生<sup>1</sup> (<sup>1</sup> 愛媛大・院・理工, <sup>2</sup> 京大, <sup>3</sup> 高知大)

「松山平野における在来ヤリタナゴと移入アブラボテのマイクロサテライトマーカーを用いた交雑判定」大内魁人・畑啓生 (愛媛大・院・理工)

「西日本におけるヤリタナゴとアブラボテのマイクロサテライト解析を用いた交雑状況の把握」吉見翔太郎・畑啓生 (愛媛大・院・理工)

「愛媛県松山平野の湧水性河川におけるマツカサガイの分布と再生産」桑原明大・畑啓生 (愛媛大・院・理工)

【高校生研究発表】(5月16日)

【公開講演会】(5月16日)

淡水魚をめぐる水辺の生物多様性—その危機と保全への取り組み—

(コーディネーター: 畑啓生, 井上幹生 (愛媛大学))

「松山の絶滅危惧種ヤリタナゴを国内外来種アブラボテとの交雑から守れ—自然再生地を用いた希少種の保全—」畑啓生 (愛媛大学)

「森と川の繋がりから考える溪流魚の暮らしとその保全」佐藤拓哉 (神戸大学)

「九州における淡水魚保全: 研究と取り組みに関する幾つかの事例」鬼倉徳雄 (九州大学)

【総会】(5月17日)

#### a. 報告事項

##### 庶務報告

学会誌発行部数、地区会員の動向 (2014年12月末現在 275名、昨年度 -9名)、会費納入率、活動報告

会計報告 2014年度会計

地区選出委員 (地区代議員、自然保護委員) からの報告

#### b. 審議事項

##### 1) 2014年度会計決算

・和田会計幹事 (代理) から報告があり、これが承認された。

##### 2) 一般社団法人日本生態学会中国四国地区会運営規

則の制定について

・鎌田会長から一般社団法人日本生態学会中国四国地区会運営規則 (案) が示され、審議の結果、これが承認された。

##### 3) 2016-2017年度中国四国地区会長の推薦について

・役員会から鎌田現会長が推薦され、これが承認された。

##### 4) 2015年度会計予算案

・和田会計幹事 (代理) から報告があり、承認された。

##### 5) 2016年度合同支部大会開催地: 鳥取

##### 6) 2017年度合同支部大会開催地: 高知

##### 7) 日本生態学会中国四国地区会のあり方について

・役員会から次の地区会から若手発表者を対象としたポスター賞を設定することが提案され、これが承認された。

### 九州地区会

#### (1) 2014年度地区委員会

2014年5月24日 (土) 琉球大学共通教育棟

#### (2) 地区大会

第59回三学会九州支部・地区合同大会 (第51回沖縄生物学会大会との合同開催)

会期: 2014年5月24日 (土) ~ 25日 (日)

会場: 琉球大学

#### 【生態学会員による口頭発表】

「ポリネーターも食べちゃおう!—食虫植物ナガバノイモチソウの生存戦略に迫る」○田川一希 (九大・院・生態)・渡辺幹男 (愛知教育大・教育)・矢原徹一 (九大・理)

「特別栽培水田における大型サギ類の場所利用と採餌行動に関する研究 (予備的研究)」○江口和洋 (九大・院・理・生物)・中原亨 (九大・院・システム生命)・徳淵信人 (九大・理・生物)

「本部町におけるコノハチヨウ成虫の発生動態と生息環境」○中井桃子 (琉大・農)・柿嶋聡 (千葉大)・下地博之 (北大)・立田晴記 (琉大・農)・\* 辻和希 (琉大・農)

「水俣湾における水銀の生物濃縮に関する研究—安定同位体分析による食物履歴の検討—」○森敬介 (国水研)・金谷弦 (国環研)

「チドリミドリガイ *Placobranchus ocellatus* の個体群動態と出現水温」○棚村太輔 (琉球大・院・理工)・広瀬裕一 (琉球大・理)

「単為生殖アリ *Wasmannia auropunctata* がオスを維持する理由」○宮川 (岡本) 美里・Mikheyev Alexander

「ヤエヤマツダナナフシの分泌液噴射による天敵防御の効果」○小林峻 (琉球大・院・理工, JSPS 特別研究員 DC1)・谷本拓夢 (琉球大・理)・碓井良太 (琉球大・院・農、現・神奈川県南足柄市)・伊澤雅子 (琉球大・理)

「数値シミュレーションを用いた西表島網取湾のウミシヨウブ種子の分散力評価」○村上智一 (防災科技研)

「琉球列島在来フナの分布の詳細とその保全について」

○高田未来美(東京大・大海研)・立原一憲(琉球大・理)・西田陸(琉球大)

「ミナミトビハゼの潮汐性活動リズム」○池上太郎(琉球大・理)・大山由貴(琉球大・院・理工)・竹村明洋(琉球大・理)

「チゴガニの集団的ウェービング行動の画像解析」○廣瀬陽・岡田二郎(長崎大院・水環)・藤崎顕彰・内田誠一(九大院・シス情)

「チョウの色模様形成における誘導モデルとタテハチョウ基本プランの改訂」○大瀧丈二(琉球大・理)

「リュウキュウウラボシシジミ(鱗翅目シジミチョウ科)の形態解析と分子系統解析」○平良渉(琉大院・理工)・田川聡美(九大院・生資環)・大瀧丈二(琉球大・理)

### (3) 地区例会

第517回 5月24日(土) 沖縄(琉球大学)(沖縄生物学会との共催で実施)

◇特別公開講演:琉球諸島の世界自然遺産登録に向けて~琉球諸島の生物多様性と保全の現状

「奄美・琉球諸島の世界自然遺産登録の課題」吉田正人(筑波大学大学院・人間総合科学研究科・世界遺産専攻)

「琉球諸島の生物多様性保全のための保護区配置と生態系管理」久保田康裕(琉球大学・理学部)

第518回 7月5日(土) 鹿児島(鹿児島大学)

「ゴンズイの超pH感受性を使った摂餌行動」清原貞夫(鹿児島大学 理事)

「共生器官特異的なシステインリッチペプチドの機能—マメ科植物もアブラムシも共生菌の制御のために同じ道具を使っている?—」内海俊樹(鹿児島大学大学院理工学研究科)

第519回 11月1日(土) 宮崎(宮崎大学)

「綾エネスコエコパークの里山の保全に向けて」河野円樹(綾町エコパーク推進室)

「綾の森の水環境と水生昆虫:照葉樹林と針葉樹林の沢の比較」林裕美子(てるはの森の会)

第520回 11月15日(土) 佐賀(佐賀大学)

「アオモンイトトンボの雌二型維持機構」澤田浩司(福岡高校)

第521回 11月22日(土) 熊本(熊本大学)

「光学的古生物学—視覚器官から紐解く古生物の生態—」田中源吾(熊本大・沿岸域センター)

第522回 12月6日(土) 福岡(九州大学)

「ヤマガラは給餌位置を固定するのか?~近縁種のシジュウカラと比較して~」○石井絢子(九州大学大学院システム生命科学府)・江口和洋(九大院・理・生物)

第523回 12月6日(土) 鹿児島(鹿児島大学)(コアSSH研究発表会と合同開催)

◇特別講演:「都市伝説??農業・食品分野で信じられている『まことしやかな話』」岡本繁久(鹿児島大学農学部)

◇高校生による課題研究ポスター発表(鹿児島県高校理科部会推薦)

「焼酎から酢は作れるか?」鹿児島県立福山高等学校理科研究同好会

「反磁性の不思議に迫る」鹿児島県立曾於高等学校科学部

「ダンゴムシの交替性転向反応—触覚の関係性—」学校法人津曲学園鹿児島高等学校自然科学部

「二酸化窒素NO<sub>2</sub>の測定器の開発」鹿児島県立錦江湾高等学校化学研究部

第524回 12月13日(土) 長崎(長崎大学)

「長崎市弁天白浜海岸の2年間における海藻フロラの継続調査」○小園淳平、飯間雅文(長崎大・環境)

「長崎市飯香の浦海岸の海藻フロラ」○山崎麻子、飯間雅文(長崎大・環境)

「海藻の凍結保存」○金井剛志、桑野和可(長崎大・院・水環)

「九州の磯焼けとその原因について」桑野和可(長崎大・院・水環)

「ネオニコチノイド系農薬がチゴガニのウェービング行動に及ぼす影響」○廣瀬陽、岡田二郎(長崎大・院・水環)、藤崎顕彰、内田誠一(九大・院・シス情)

「フタホシココロギの嗅覚学習に対するカフェインの急性的および慢性的経口投与の影響」○杉町誓児、岡田二郎(長崎大・院・水環)

「タラバガニ稚ガニにおける共食いを考慮した最適飼育密度の推定」○竹下文雄(長崎大・院・水環)、田村亮一(道栽水試)

第525回 12月20日(土) 大分(大分大学)(第4回大分自然環境研究発表会との合同開催)

「くじゅう連山の水環境—坊ガツルを中心に—」炭本悟朗(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)

「九重における湿原の植生変遷について」西野文貴(九重の自然を守る会)

「大分県九重町内のオオハンゴンソウ駆除の取組み」指原孝治(九重の自然を守る会)

「広塩性の海水魚スズキの知られざる生態—雌雄で異なる外部形態・回遊生態—」景平真明(九州大学大学院生物環境科学府農学研究院)

「シイタケを食うネズミならびに大分県産トリュフの話題」○村上康明<sup>1</sup>・馬場稔<sup>2</sup>・荒井秋晴<sup>3</sup>(<sup>1</sup>大分県農林水産研究指導センター、<sup>2</sup>北九州市立自然史・歴史博物館、<sup>3</sup>九州歯科大学)

「杵築市横岳自然公園におけるアサギマダラ蝶の生態について」三東崇昇(横岳にアサギマダラを呼ぶ会)

「水生昆虫階梯」堀英樹(大分生物談話会)

「大分市郊外における哺乳類相調査とそれを活用した環境教育プログラムの開発」中村彩・永野昌博(大分大学大学院生態学研究室)

「中津干潟の渡り鳥の状況について」足利由紀子(NPO法人水辺に遊ぶ会)

### (4) 地区会報66、67号発行

## 書評

井上英史・中川尚史・南正人著 (2013) 「野生動物の行動観察法」 東京大学出版会 183pp. ISBN:978-4-13-062223-3 定価 3200 円 (税別)

野外で野生動物の調査をしたいと思ったら、その動物の専門家について行ってその人の調査法を見せてもらうのが一番手っ取り早い。だが、まわりにそのような研究者がいない場合、独学で行うしかない。著者らが「はじめに」で書いているように、「…いわゆるハウツーの部分については、先人の背中を見て盗むべきであるという職人気質的なところがあるせいか、教科書的な書籍がほとんどない」のが現状であった。それなら原著論文を読んだらいいと思うかもしれないが、いわゆるマテメソはあっさり書かれていて、肝心のコツのような部分は書いていない場合が多い。初級者向けに調査法について書かれた哺乳類の入門書があったらきっと便利に違いない。本書には初学者が野外調査を行う際の注意点や哺乳類の観察を行う際のコツが書かれており、「方法編」と「実践編」から成り立っている。

第1部は方法編とあるが、野生動物観察法の概論と書いている。「第1章. 研究計画法」は卒研を考慮して書かれたものであろう、研究のプロセスや研究テーマの設定、研究テーマの立て方が懇切丁寧に書かれている。「第2章. データ収集法」は、本書の核心ともいえる章である。必要な装備、危険対処法、調査地でのマナーが事細かく説明されている。特に、調査地でのマナーについてこれほどわかりやすく書かれている本はあまりないと思う。動物の観察では、伝家の宝刀である個体識別のやり方について図と写真入りで説明されている。「われわれ人間が友人を見分けるときに、細かな個々の特徴で見分けられているのではなく、全体の感じで見分けられている…長時間観察していれば、顔や姿勢や歩き方などの特徴がわかるようになる。」(p.22) 一見当たり前のようであるが、実はとても奥深いことが書かれている。続く、「第3章. データ解析法」ではエクセルなどの表計算ソフトへの入力法が説明されている。統計処理については基本的なものが扱われている。

第2部は実践編であり、「第4章. 生態」、「第5章. 社会」、「第6章. 繁殖」、「第7章. 異種間関係」とテーマごとに分けて日本に生息する野生哺乳類の観察例が紹介されている。リスやムササビなども紹介されているが、圧倒的にシカとカモシカとサルの研究例が多い。年平均930時間のカモシカの観察例やニホンジカの個体群構成など伝説になりそうなフィールドでの研究例が紹介されている。

副題に「実践日本の哺乳類学」とつけられているとおり、本書ではこれまでのわが国の個体識別を中心とした研究法とその成果が紹介されている。従って、行動データの収集法については本書を読めばわかるが、たとえば縄張りの分布図の作成法や群れ内の順位の手探り方などは本書では説明されていない。実践編として個々の研究例

を紹介するよりも、行動観察にもとづいて導かれること、たとえば行動圏を求める方法や餌選択の定量法などを詳しく説明して欲しいと感じた。また、最近ではアザラシなどにデータロガーを装着することで海中での活動などがわかるようになった(佐藤 2007)。このような新しい機材を使用した行動解析法についても解説して欲しいと感じた。

本書は初心者向けにわかりやすく、丁寧に書かれているのであるが、方法編が全体の1/3のボリュームというのは淋しい気がした。できたら行動観察以外の項目を盛り込んで方法編を充実させ、行動観察に絞らずに哺乳類学方法論の教科書を目指して欲しいと思うのは評者の我儘であろうか。

また、以前は若手が海外のフィールドで哺乳類の研究をするというのは非常に敷居の高い印象があったが、最近では若いうちから海外で哺乳類の研究を行う人が増えているように思う(金森 2013)。調査地が途上国の場合、相手国の研究者に日当を支払ったり、現地で案内をするガイドを雇ったり、場合によっては警官や地方自治体の役人が調査に同行するため彼らの日当も支払わなければならない。しかし、本書では調査地でのマナー(p.18)で海外での調査活動について若干述べられているだけなので、できたら海外調査での注意点についてもっと詳しく説明して欲しい。本書を片手に敷居をまたいで、さらに海を越えていく若手の哺乳類研究者がさらに増えていくことを願う。

### 参考文献

金森朝子 (2013) 野生のオランウータンを追いかけて—マレーシアに生きる世界最大の樹上生活者(フィールドの生物学). 東海大学出版会, 秦野市, 220p.

佐藤克文 (2007) ペンギンもクジラも秒速2メートルで泳ぐ—ハイテク海洋応用学への招待—(光文社新書). 光文社, 東京, 299p.

(長崎大学熱帯医学研究所 角田隆)

ダイビングチームすなっくスナフキン編 (2015) 「大浦湾の生き物たち—琉球弧・生物多様性の重要地点、沖縄島大浦湾」 南方新社 123pp. ISBN:978-4-86124-320-2 定価 2000 円 (税別)

本書は、無論、沖縄県名護市の東海岸、辺野古の基地建設の問題とは無関係ではなく、巻末には、本学会をはじめ21学会による「著しく高い生物多様性を擁する沖縄県大浦湾の環境保全を求める19学会合同要望書」が掲載されている。「著しく高い生物多様性」とはどのようなものだろうか? 日本生態学会に属していても、自分の専門分野やフィールドを離れると、ピンと来ない方が多いと察する。本書に掲載された655種ものかけがえのない生物の写真を見ることで、はじめて「著しく高い生物多様性」が想像を超えたものであることが実感できるだろう。

一方、本書は純粋に海洋生物学を学ぶうえで、「生息場所」図鑑として格好の良書である。各種機器の発達し



た現在では、海の底に自ら降り立ち、計測と採集を行うことができる。運が良ければ、研究船を使って深海底で作業をすることもできるかもしれない。それでも、多くの海洋生物学者にとって、海底の様子はドレッジや採泥器で得られた底生生物と堆積物の様子から類推しているに過ぎない。汀線のむこう、渚の先の海底に、いかなる生物がどのように暮らしているかを、本書は詳細に教えてくれる。森・川、マングローブ、干潟、潮間帯・海岸、海草藻場、ユビエダハマサンゴ群集、塊状ハマサンゴ群集、泥場、砂地、ガレ場、アオサンゴ群集、沖・瀬。これは本書の目次であり、これだけの様々な生息場所の写真が、たった湾口が4 kmしかない大浦湾で撮影されている。編者の「すなっくすなフキン」は大浦湾を基点として活動するダイビングチームで、数々の写真展でこの海の「今」を伝えている。本書は、そのほんの一部が詰め込まれたものだ。

潮下帯の泥場や砂地、ガレ場といった生息場所は、サンゴ礁や海草藻場に比べて研究が遅れており、環境影響評価でも過小な扱いとなっている。本書では、そのよう

な生息場所こそ、多くのページが割かれている。例えば、泥場では、見開き2ページにミナミウミサボテンが林立する海底が掲載されており、ところどころ生物の巣穴と、生物が排出した泥の塚を見ることができる。解説によると「国内のサンゴ礁では、岸の近くにここまでの深場を持つ地形はとても珍しく、大浦湾の大きな特徴となって」おり、大浦湾の貴重性を知ることができる。次ページ以降には、ムカデメリベや、キクメイシモドキが付着したスイショウガイなど、この生息場所を利用する様々な海洋生物の生態写真が添えられている。また、大浦湾で発見された3 m以上の大きさの未記載種、クレナイオオイカリナマコの解説など、学術監修の小淵正美氏による数々のコラムから生物の生活史や学術的背景を知ることができる。巻末に生物名の索引があり、標準和名と学名が記されているため、海洋生物の生態図鑑としても利用できる。望むとすれば、ウミウシ類126種の写真を大きくして、また、学名索引と分類群別の種リストがあるとより便利であろう。

(高知大学教育学部 伊谷行)



京都大学  
生態学研究センター

Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201  
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

## 協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成28年3月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申し上げます。改めて平成28・29年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成28年2月26日(金)までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式はセンターHP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/cooperative-researchers.html>) からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

### 京都大学生態学研究センター 協力研究員の委嘱についての申し合わせ

1. 生態学研究センター(以下「センター」という)の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
2. 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
3. 協力研究員の任期は原則として2年とする。

### 【申請書の提出先・問い合わせ先】

京都大学生態学研究センター共同利用担当  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
E-mail: [kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp](mailto:kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp)  
Tel: 077-549-8200 / Fax: 077-549-8201

## 👁 センター関係者の動き 👁

- 1) Jeremy James Piggott 氏 オタゴ大学(ニュージーランド)・リサーチフェロー が、招へい研究員(特別招へい講師)として2015年11月2日~20日まで滞在されました。
- 2) Anu Katriina Valtonen 氏 東フィンランド大学(フィンランド)・博士研究員 が、招へい研究員(客員)として2015年12月1日~2016年3月31日までの予定で滞在中です。



## ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。  
次年の会費は10月以降に請求をします。会費未納者に対しては6月に再請求します。  
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：一般社団法人日本生態学会

退会する際は前年12月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。  
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

## 会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費* (保全誌購読者**)	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	11000円 (13000円)	○	○
正会員（学生）	8000円 (10000円)	○	○
賛助会員	20000円 (22000円)	×	×

\*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。  
詳細はウェブサイトをご覧ください。

\*\*非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。

なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません

### 【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

### 【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円

既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年10月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。

新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

## 地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円\*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中国・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

\*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 <http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。